

ると指摘された。

真島氏は、著者の言う表象の「戯れ」に注目し、共同体の結合原理、あるいは、共和主義の原理と旅行者＝遊戯者との間に生まれる軋みについて言及した。生の欲求による隔離と情念による結合の矛盾、わけ隔てられるべき存在と紐帯の衝突を意識する啓蒙期という時代における、遊戯者の存在、つまり、旅において風景という

戯れや共認不可能性という賭けと与る者、を際立たせて論評した。

共同研究の研究会でおこなわれるものとしては異例の合評会であったが、前回の「旅と表象の比較研究」プロジェクトと今回の共同研究プロジェクトを連結させ、論点を整理するという目的は一応果たせたと考える。(高知尾 仁)

◆共同研究プロジェクト◆

マルセル・モース研究—社会・交換・組合

平成 18 年度第 2 回研究会

【日時】平成 18 年 11 月 6 日(月曜日)午後 1 時半より午後 6 時

【場所】東京外国語大学本郷サテライト 5 階セミナールーム

【報告】

1. 渡辺公三(立命館大学)

「第三期以降(1925 年～)の業績、および書評文約 400 点の読解をめぐる研究の展望」

2. 関一敏

「第一期(1899～1914 年)の業績をめぐる研究の展望」

【報告の要旨】

本第二回研究会では、渡辺による第一報告の冒頭で、モースの書評文約 400 点が彼独自の民族学的思考の発展プロセスにとり、第一期～第五期の時期区分をこえたきわめて重要な意味をもつとの指摘が示された。そこで研究会報告の形式をその場で変更し、渡辺は 1925 年以降のモース研究をめぐる展望についてひとまず概観するにとどめ、1899～1914 年の業績をめぐる第二報告については、渡辺が用意した書評文編年リストにもとづき、この時期の書評文の具体的な内容と顕著な特質について関氏が主たる専門的解説を提示しつつ一同でリストを精査する作業内容を行った。

1. 第三期以降(1925 年～)の業績、および書評文約 400 点の読解をめぐる研究の展望

1925 年以降のモースの業績のうち、第五期(1947～1950 年)の主たるテキストは事実上『民族誌学の手引き』に限られるため、選択上の問題はとりたてて発生しない。『民族誌学の手引き』の日本語下訳作業をほぼ終えている渡辺は、同書中とくに第九章「宗教現象」を事例にとりあげ、第九章の節構成と自らの訳文とを出席者に示しながら、その思考の特質を概説した。

この第三期(1925～1929 年)および第四期(1930～1947 年)に関し、渡辺はモースの主たる業績リストを示しながら、自らによる基幹テキストの選択根拠を説明した。このうち第四期については、容易に予想されうる「社会的凝集性」「個体」「身体技法」「人格」等の問題系をめぐる有名な論考群にくわえ、渡辺が基幹テキストと見定めたのは、モロッコ旅行記(1930)、ピカソ論(1930)、土着芸術論(1931 年)、第一次大戦期以降のフランス社会学史論(1933 年)、シルヴァン・レヴィ論(1935 年)、E・アレヴィ宛の書簡(1936 年)、アントワヌ・メイエ追悼文(1937 年)、技術・テクノロジー論(1941 年)などである。また「贈与論」後に相当する第三期については、贈与論、文明論、冗談関係論のほか、デュルケム論(1925 年)、社会学論(1927 年)、フレイザー論(1928 年)、デュルケム『社会主義論』への序文

(1928年)、社会科学論(1929年)など、デュルケム社会学を独自の方向へ発展させた民族学者マルセル・モースの社会学像ないし社会科学像の解明に焦点をあてた基幹テキストの選出が試みられた。その際副次的な問題として議論の対象となったのは、贈与論が発表された1925年の他論考を、たとえ暫定的な方策としてであり、第二期と第三期のいずれに位置づければモースの思考プロセスがより明確な輪郭を伴ってくるのかというテクニカルな論点であり、この点については今後の本研究会の課題となった。

(真島一郎)

2. 第一期(1899~1914年)の業績をめぐ る研究の展望

モースが生涯を通じて精力的に発表した書評文(本研究会で把握する限りで全483点)を年代毎に区分すれば、1898年=21点、99年=37点、1900年=35点、01年=33点、02年=27点、03年=34点、04年=35点、05年=33点、06年=30点、07年=40点、10年=32点、13年=40点、25年=86点の内訳となり、量として突出した1925年の一年を除けば、そのすべてが第一期に集中する。

宗教史学並びに宗教民族学をめぐり関氏の専門的解説を頼りに、書評テキスト全483点の発表年とタイトルとを出席者全員でひとつひとつ吟味しながら、まず各年の書評文で、本研究会の考察から除外しがたい重要な書評対象書と著者名を抽出する作業が行われた。いずれも20世紀前半期の名だたる先学にあたる著者名のみをあげれば、例えばそこには A. Hillebrandt, G.P. Tiele, Spencer & Gillen, Sylvan Levy, J. Deniker, W.W. Skeat, E. Crawley, J.G. Frazer, F. Boas, A. Lang, William James, A.C. Haddon, A. Mathiez, L. Frobenius, A.W. Howitt, W. Wundt, A. van Gennep, B. Marrett, A.R.

Radcliffe-Brown, G. Dumezil, G. Elliot Smith の名が並ぶ。

その後の共同討議では、すでにテキストタイトル通覧の時点から垣間見える、モース書評文の特質と考察上の問題点が出席者のあいだで指摘された。モースによる書評文の特質としては、第一にドイツ語、英語、イタリア語、オランダ語をはじめとする非フランス語文献の書評率がきわめて高いことが明らかとなった。第二に、理論書の書評がほとんどない代わりに、大半の書評対象が世界各地の民族学的ないし宗教(史)学的モノグラフから構成されており、逆説的にもそれがモースの思考のアクチュアリテイ、いいかえれば一世紀の時間経過に抗う風化度の低さをもたらしたものと臆断することも可能である。

他方、モース書評文の研究に際しては、基幹的な書評テキストを今日の問題意識により選定するのか、あるいはモース自身の思考の変遷をもっぱら重視して選定するのか、いずれの方途をたどるかで研究の展望は大きく分かれる点が全員のあいだで確認された。同時に、モースの思考遍歴を総覧するうえで有益なテキストツールとして、これら書評文と並んで、モースによる各年の講義抄録文が帯びる重要性、さらに既存のモース電子テキスト群にもとづく索引検索プログラムの可能性と意義も指摘された。

そこで共同研究初年度をしめくくる次回研究会では、モース書評文の再吟味を渡辺が、講義抄録文の概観を真島が、また電子テキストを介したモースの語彙運用に関する萌芽的な論点提示を高島が試みることとし、本第二回研究会では時間の制約から十分になしえなかった、モース第一期の書評文を除いた業績研究の展望について、あらためて関が報告する旨を一同で確認して会を閉じた。

(真島一郎)